文化的資本を活用する街づくりで都市の再生・発展を目指す

大阪市立大大学院　創造都市研究科　佐々木雅幸研究室

グローバル化の進展や産業構造の変化により、企業誘致や公共事業に頼る経済政策だけでは、都市の再生・発展は困難になりつつある。そこで近年、世界的に注目を集めているのが「創造都市（クリエイティブシティ）」だ。草の根的な市民の活動により、産業や経済、文化を活性化させる都市のことである。日本の創造都市論の第一人者である佐々木雅幸教授は、市民のネットワークづくりや啓蒙活動、行政との連携を通して、創造都市の可能性を追究している。

フローチャートで分かる佐々木研究室

大学院生の主な出身分野

- 経済学
- 法学
- 社会学
- 地理学
- 建築学

など

◎大学院生の出身学部は、経済学を中心に法学や社会学、地理学、建築学、政策学、都市計画学など幅広い。韓国、中国、ドイツ、ベルギー、オーストリア、アメリカなど、世界各国からの留学生も多い。

研究にかかわる学問分野と研究内容

◎「創造都市（クリエイティブシティ）」は、市民の創造活動によって先端的な芸術や豊かな生活文化、革新的産業を振興する都市のことで、環境や平和、失業などの問題を、草の根的に解決する力を持っているとされる。さまざまな角度から都市の在り方を考察するため、経済や法律、政策、建築、都市計画のほか、社会的弱者のための医学的知見なども必要となる。

研究成果と社会のかかわり

- 都市再生
- 文化政策
- 芸術振興
- 雇用創出
- ホームレス支援

など

◎各省庁やユネスコとの連携による都市政策研究やホームレス支援、行政やクリエイター、NPO法人のネットワークづくり、商店街の活性化など多岐にわたる。

幅広い教養と何度でも挑戦できる粘り強さが必要

都市論分野が求める学生像

幅広い教養

チャレンジ精神　未知の分野への興味・関心

私の母校は名古屋の東海高校という私立高校です。今思うと少し変わった学校で、勉強ばかりしている生徒はあまり尊敬されませんでした。勉強以外のプラスアルファがあって初めて、みんなから認められる、という雰囲気がありました。私も高校時代は勉強だけでなく、読書や演劇などにも打ち込みました。そうして学んだことが、今の研究にも生きています。都市論では経済学のみならず、芸術や文化、歴史など幅広い教養が求められます。さまざまな分野に関心を持って取り組める姿勢が必要です。

また、失敗しても、何度でも立ち向かう粘り強さも必要です。今の若い人は、簡単に出来ることしか手を出さず、一度失敗すると諦めてしまう傾向があるように思います。研究に失敗はつきもの。労をいとわず果敢に向かっていく姿勢を身に付けてほしいと思います。

そうした資質さえ備えていれば、性格が大らかでも神経質でも構いません。自分なりに教養を深め、不器用でも地道に挑戦し続けられる人に、この分野に進んでほしいと思います。

高校生へのメッセージ　人間は悩んだ分だけ成長します。学習や恋愛でも何でもいい。とことん悩み抜いてください。人との出会いも自分自身を成長させる大きな力になります。高校や大学で是非、よい先生を見つけてください。また、大学では専門外の学部の学生と交流することも、視野を広げる上で大切です。

佐々木雅幸 教授 Sasaki Masayuki

大阪市立大大学院創造都市研究科教授。大阪市立大・都市研究プラザ所長。同大グローバルCOEプログラム拠点リーダー。京都大大学院経済学研究科博士課程修了後、大阪経済法科大経済学部講師、金沢大経済学部助教授、同教授、イタリア・ボローニャ大客員研究員、立命館大政策科学部教授を経て現職。金沢市文化活動賞、日本都市学会賞を受賞。主な著書は『創造都市の経済学』（勁草書房）、『創造都市への挑戦』（岩波書店）など。

研究を志したきっかけ

グローバルシティに代わる新しい都市論の可能性

私は経済学部出身で、大学院では財政学を専攻しました。経済学者には国民経済を研究したがる者も多くいますが、私が所属した研究室はそうした傾向に一石を投じようと、環境や文化など、多面的な視点から経済学を追究していました。学部時代から都市の発展に関心があった私は、そうした研究室の空気に感化され、欧米と日本の都市経済や地方財政の比較研究など、研究者があまり注目しない分野の研究をしました。

やがて世界がグローバル化時代に入ると、都市論ではグローバルシティの研究が活発になりました。ニューヨークやロンドン、東京などの巨大都市がどのように変化していくのか、多くの研究者が注目しました。私も毎年ニューヨークに赴いては各国の研究者と議論を交わしたものです。

しかし、グローバルシティは弱肉強食の経済システムで巨大金融資本の思惑に左右されるため、非常に不安定で、成長と衰退という大きな波に巻き込まれる可能性があります。1990年代に入り、そうした危険性が浮き彫りになるにつれ、研究者は新しい都市像を研究するようになりました。当時金沢大に勤務していた私は、地方都市から世界を見つめる中で、グローバルシティに代わる都市の在り方があると感じ始めました。そして、さまざまな国際会議や調査に参加するうちに、これからは「創造都市（クリエイティブシティ）」という概念が主流となり、社会システム全体を見直す上で重要になるという考えに至ったのです。

研究概要

文化やアートが都市の再生・発展の原動力になる

創造都市は、市民の自由な創造活動により先端的な芸術や豊かな生活文化を育み、新たな産業を生み出す「創造の場」に富んだ都市のことです。グローバルシティの原動力が金融や不動産ならば、創造都市を動かすのは市民や企業の創造性なのです。

創造都市の意義に気付いた後は、毎年のニューヨーク行きをやめ、イタリアの地方都市ボローニャ[1]に赴き、

金沢とボローニャの比較研究を行いました。そして、創造性に富んだこれらの都市に、21世紀の理想の都市像があることを確信し、著書で明らかにしました。

本来、都市はそこに集まる人々が産業や文化を創造する場でした。しかし、産業構造の転換やグローバル化の影響などにより、多くが機能不全を起こしています。日本では今まさに産業の空洞化が深刻化しつつありますが、ヨーロッパではそれが20年ほど前に起こり、製造業を土台に発展してきた多くの都市が衰退しました。その要因を究明して創造の場としての都市の姿を取り戻すことも、創造都市論の大きな目的です。例えば、ボローニャには中小企業主体の柔軟なネットワークがあり、大量生産的でない、職人によるものづくりが生きています。街並みの保存に優れ、芸術文化や福祉を担う職人工房などの協同組合も発達しています。

金沢では都市の再生を目指し、90年代に大規模な実験が行われました。使われなくなった紡績工場の倉庫を改修して「[2]金沢市民芸術村」にし、市民が24時間自由に使える芸術創造・伝承の場としたのです。また、2004年には市民の発案により、学校跡地を利用して現代アートのみを扱う「[3]金沢21世紀美術館」を開館しました。スペインの工業都市として栄えたビルバオは、[4]ビルバオ・グッゲンハイム美術館という斬新な美術館が出来たことで一躍アートの町として再生し、世界中の注目を集めるようになりました。私たちはこの都市再生の成功例を基に市長に積極的に働きかけて開館に至りました。市民の創造活動を原動力とすることで伝統的にあった産業も更に発展し、都市の活性化につながりました。

現在の研究テーマ

都市の再生と社会的弱者の支援が研究の2本柱

研究室では、大阪を舞台に、新産業の創出、都市コミュニティーの再創造に取り組んでいます。大阪各所に設置した「[5]現場プラザ」を拠点に、コンサートや絵画展などのイベントの企画・運営、クリエイターを招いてのワークショップ、公開講座を通しての啓蒙活動などを行い、市民の創造的な力を引き出せる環境やネットワークづくりを進めています。都市の貧困や差別、住環境問題の解決も都市論の主要テーマであり、ホームレスや住宅困窮層など社会的弱者の就労・居住支援も行っています。

日本では景気が悪くなると公共工事の必要性が叫ばれてきました。今後はそれだけでなく、金沢のように芸術や文化を創造する市民の力を引き出すことが、都市の再生・発展のためにますます重要になるでしょう。

都市研究には尽きぬ泉のような魅力があります。掘れば掘るほど発見があり、新しい興味が湧いてくる。皆さんも自分の住んでいる町に目を向けて、改めて課題や魅力を見つめ直してはどうでしょうか。

写真　大阪市立長橋小学校の空き教室を活用して行われている製靴教室でのフィールドワークの様子

用語解説

❶ボローニャ
イタリア北部のエミリア・ロマーニャ州の州都。芸術、文化、ビジネスが盛んで、2000年度に「欧州文化都市」に選ばれた。

❷金沢市民芸術村
ミュージック工房、アート工房、ドラマ工房など七つの屋内施設と伝統工芸を伝承する金沢職人大学校を併設した市民のための多目的アートスペース。1997年に「グッドデザイン大賞」を受賞した。

❸金沢21世紀美術館
04年に金沢市中心部に開館したコンテンポラリーアートの美術館。「開かれた美術館」を目指し、展覧会のほか、子どもから大人までを対象とした教育普及プログラムの企画・実施、アート関連資料の提供などを行う。

❹ビルバオ・グッゲンハイム美術館
スペインのバスク自治州の工業都市ビルバオに97年に開館した近現代アートの美術館。カナダ出身の建築家フランク・ゲーリーの設計による奇抜な外観が話題となり、ビルバオを文化都市として飛躍させた。

❺現場プラザ
大阪市立大による都市研究のためのサテライト施設。アートカフェや集会・研修の場を各所に設置し、ネットワーク型の研究・街づくりの拠点として、市民のワークショップなどを展開している。

大学院生が語る

映画の自主上映活動で地方都市再生の道を探る

辻堅太郎さん
Tsuji Kentaro
大阪市立大大学院創造都市研究科
都市政策専攻修士課程２年
（鳥取県立鳥取東高校卒業）

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 高校時代、鳥取県知事は改革派の片山善博氏で、「地域の自立と再生」を政策のキーワードに掲げていました。その影響を受けて、私は地域経済や地方自治に興味を持ち、県内で行われたシンポジウムや片山前知事が立ち上げた「鳥取自立塾」に参加しながら地域の自立について考えていました。

鳥取大地域学部地域政策学科に進学後、街づくりをされている方を大学に招いて勉強会を開いたり、中心市街地の活性化事業を企画・運営したりして、街おこしの取り組みを始めました。佐々木教授に出会ったのもその頃です。当時文化経済学会の会長をされていた佐々木先生の講演を聞いて創造都市論に興味を持つようになり、大学卒業後、大阪市立大大学院へ進みました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 鳥取市のような中規模の地方都市において創造都市論を展開する方策を研究しています。大学2年生から鳥取市で旧町役場の議場を利用して映画祭を行ってきたこともあり、メインテーマは地域で映画館を設立・運営している各地のNPO法人についての研究です。

日本には演劇や音楽などを対象とした文化政策が数多くありますが、映画は戦前にプロパガンダに利用されたという経緯もあり、政策がほとんどなされていません。そうした中、00年頃から埼玉県深谷市の「深谷シネマ」、群馬県高崎市の「シネマテークたかさき」などでNPO法人が、草の根的に映画の自主上映を行い、都市の活性化につなげている事例が見られるようになりました。

これらの活動を調査・研究し、地方都市において文化資本を蓄積していくにはどうしたらよいのか、アートを核に生活の質を向上させる方法について研究しています。将来は地元の鳥取市に帰り、行政職員として都市、文化の振興に携わりたいと考えています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A ともすれば、高校生は自分たちのコミュニティーだけで過ごし、見えないものに関心を持ちにくい傾向にあります。いろいろな人と出会い、さまざまなことに関心を広げることが大切です。ただ、実際にそれを行うのは容易ではありません。特に地方都市は刺激が少なく、人との出会いも限られています。高校時代は勉強や部活動に打ち込んで毎日を充実させることに注力し、大学生になった時に世界を広げていく足掛かりを作っておくとよいかもしれません。そのためには、将来をしっかり見据え、志望を実現できる大学を選ぶことが大切です。

大学には、自分とは違う志向・志望を持つ学生が大勢います。そうした仲間から刺激をたくさん受け、興味を広げてください。専門外の先生にアドバイスをもらい、知見を広げるのもよいでしょう。大学をとことん活用して自分を高めていくことが、夢の実現につながるのです。

私の高校時代

合唱コンクールでクラスが団結

●高校時代の一番の思い出は、３年次の合唱コンクールです。母校の合唱コンクールは、文化祭の一環として秋に開催され、予選は学年ごと、決勝は全校で行われます。２年生の時、私のクラスは決勝まで進み、大いに盛り上がりましたが、３年生との力の差はいかんともしがたく、決勝で敗退しました。私も含めて、クラスメート全員が悔しがり、３年生になったら必ず優勝しようと皆で誓い合いました。３年生の合唱コンクールが近付くと、その時ばかりは受験勉強も忘れて、朝や放課後に集まって必死に練習しました。そして、ついに優勝の栄冠を手にすることが出来たのです。

クラスが一丸となれたのは、悔いを残したくないという思いを、皆で共有できたからだと思います。力を合わせて頑張った経験は、絶対に無駄にはなりません。皆さんも、悔いの残らない充実した高校生活を送ってください。